

棋士たちの名言

先日新聞に、将棋の藤井聡太二冠が4年連続で最多勝率を達成したという記事が載っていました。高校生活をあと2か月残した段階で、自主退学の決意をしたばかりだけに、ひとときわ面白いニュースだと感じました。同じ年齢の子供を持つ親として、親御さんはどういう心境で子に接するのだろうかなどということ、ついつい考えてしまいます。

■ 棋士たちの逸話

わたしは将棋のことは全く分からないにもかかわらず、棋士の名言や逸話は大好きで、いつの間にか収集するようになってしまいました。最も印象に残っているものは、名言とは言えないかもしれませんが、内藤國男のエッセイに紹介されている、大山康晴の次の言葉です。

「お金というものは女房と税務署に知れると、もうお金じゃないよね、内藤さん」

内藤は大山の偉大さを称えるエッセイなかで、静の大山、動の升田の対局戦はまるで名優の舞台を見るように見事なもので、谷川、羽生などはまだまだ巨木になりうるかどうか、大山、升田の両巨頭の足元にも及ばないと力説しています。1993年の文章なので、こういう評価になるのでしょうか。こうやって大山賛歌を延々と続けた最後に、先述の名言が紹介されています。

将棋の打ち上げの席に、部屋に早く入り過ぎて一人ぼつねんと座っている内藤に向かって、大山はおもむろに「お金というものは・・・」と述懐したのだそうです。何があったのかはわかりませんが、よっぽどつらいことがあったのでしょうか。

内藤は次のようにエッセイを結んでいます。

「そのとき私は突然思いもかけない妙手を放たれた感じとつさに応手が分からず、目をぱちくりするばかりであった」（『将棋世界』1993年8月号）

それから、いまではすっかりタレントとして有名になった加藤一二三の言葉も含蓄があります。その発言がほとんど名言と言ってもよいのかもしれませんが、わたしにとっての名言は、加藤が無敵を誇っていたころのものです。

彼は対局時に締めるネクタイが異常に長いことで知られていました。当時の画像を確認しても、ネクタイの剣先がピタリと畳に張り付くほどの長さです。記者からネクタイの長さについて質問された加藤はこう答えたそうです。

「人から見て長く見えるのはわかっています。でも自分ではまだ短いように思うんです」

ネクタイというものは、社会性の象徴のようなもので、他人からどう見られるかが重要なポイントであるはずなのですが、この名言からは常人には思いも及ばぬ価値基準に生きる天才の生きざまが、集約されているように思います。いや、冗談ではなく。

■ 師弟愛とライバル関係

藤井聡太の師匠、杉本昌隆八段の弟子を思う言葉にも感動させられます。藤井が棋士になる二年前、杉本はこう語っていました。

「彼（藤井）がもし棋士になれなかったら、私は責任をとって引退しなければ」
その後、師弟相次いで八段に昇進したのは、記憶に新しいところです。

ところで、杉本の語るところによると、自身にとってのライバルは、故・村山聖九段です。杉本は「村山聖君」と呼び、「きっと向こうも同じように思ってくれてたんじゃないかと思っています」とインタビューのなかで述べています。村山九段が亡くなったのが、1998年の夏です。20年以上も昔のライバルの姿を思い描き、杉本はライバルとの関係を心のなかで育てているのです。

不世出の天才と認められながら、名人位を手にする事なく29歳で病のために亡くなった村山聖の生涯は『聖の青春』として出版され、映画化もされました。

ネフローゼを患いながら寿命を削るように将棋を指し、仲間たちと痛飲する姿は、輝かしくも痛々しいものでした。その村山九段にとって最後まで心の支えであり、『聖の青春』のなかでも和らかな光を放つのが、師匠である森信雄七段との師弟愛です。

ほんの些細な手続き上の行き違いで、村山少年を大人の争いに巻き込んでしまい、奨励会入会を一年遅らせてしまってから、森は実の親以上に親身に愛弟子の面倒を見ていました。お互いに破天荒なもの同士、気持ちを通じ合うところがあったので、『聖の青春』にも仲の良い兄弟がじゃれあうような頬笑ましい場面が登場します。

その森七段が引退会見の席で「本当は村山君と一緒に引退したかった」と語っていたのが印象的でした。

村山は「将棋は神の世界だ」と言っていますが、その神とは全てを見通し調和を保つような存在ではなく、白か黒か、生きるか死ぬかの判定を下す、ひたすら厳しい存在です。難病の子たちを集めた寄宿舎で暮らし、日常的に死に直面していた村山にとって、絶対的な存在とはこのようなものだったのでしょうか。A級に昇格した直後の「棋士年鑑」のなかで「神様が一つだけ願いをかなえてくれるとしたら何を望みますか」というインタビューに対し、村山は、たった一言「神様除去」と答えています。

これはもう天才にしか口にするのでできない一言だと思います。

(所長 瀬戸 英晴)